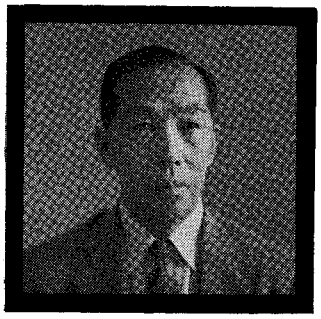
故 名誉会員　大坪喜久太郎氏をしのぶ



大坪喜久太郎先生が逝去された。11月23日の夜半，東京医科歯科大学附属病院において。先生は今年の春以来札幌の国立病院に入院され，口腔内の腫瘍の治療に専念しておられたのであるが，病状が好転しないので，思い切った手当をされる目的で，去る9月26日に上京されて治療に当っておられた。御逝去はそれから約2ヵ月後のことであった。われわれ北大，室蘭工大などの関係者にとっては9月に千歳空港でお見送りをしたのがこの世における最後のお別れとなってしまった。そのとき握手された先生の手の温かさをつい今しがたのことのように掌に感じる。旅先での御逝去であったため，11月24日のお通夜，25日の告別式とも御遺族，近親の方々および在京の友人，北大，室工大の同窓生，急拠かけつけた両大学の関係者のみでしめやかに密葬の儀がおこなわれ，御遺骨は嗣子暎久氏の胸に抱かれて翌日札幌のお宅へ帰られた。室蘭工業大学では故大坪学長の御遺徳をしのんで，来る12月15日に大学葬をとり行なうことになっている。

先生は明治31年に富山県黒部市に御出生，大正11年九州帝国大学工学部土木工学科を御卒業後一時電力会社におられたが，大正12年ベルリン大学に留学，大正14年5月には開学後間もない北海道帝国大学工学部土木工学科に新進気鋭の助教授として招聘され，爾来35年間にわたり，教授，評議員，工学部長として学生の教育，研究に当られ，現在わが土木界の第一線で指導的役割を果たしている多くの技術者を世に送り出され，また北海道開発，特に北海道における土木技術全般の向上に対して大きな足績を残された。

先生は北大に御赴任後，昭和6年から2年間にわたってオーストリヤ，ドイツ，フランスの各国へ留学され，主としてレーボック教授の下において研究に励まれた。帰国後ただちに北大工学部において水工学第二講座を分担され，当時まだ黎明期にあったわが国水理学の発達におおいに尽力された。当時の日本ではまだ珍しい存在であった本格的なドイツ式の水理実験室を北大に建設し，活溌な研究活動を行なわれた。当時北海道拓殖計画の基本線に沿って進行しつつあった石狩川下流部改修事業に関連した多くの困難な水理学上の問題を解決されたのもその頃であった。昭和14年に土木学会賞を受賞された論文も，その当時の研究成果の一部である。

先生は非常に健康に恵まれておられ，スポーツマンであって特にテニス，登山，スキーなどを好まれ，北海道の山野を跋渉されたこともしばしばである。また碁も大変お強かった。終戦後の混乱期，ことに学制改革によって学校行政がむずしかった時期に推されて工学部長になられ，前後5期にわたって北大工学部の拡充整備のため，すべてをなげうって献身的努力を払われた。外にあっては支部長として土木学会北海道支部の発展に尽され，昭和42年には土木学会の名誉会員に推挙された。また，北海道総合開発委員会委員として幾多のすぐれた識見を被露された。35年5月には室蘭工業大学学長に就任されたが，先生が学長になられてからの同大学の拡充発展には目覚しいものがあった。

先生はお酒を嗜まれたが，大変奥様思いの方で，程よく酔がまわると，口ぐせのように老妻が待っているからと席を立たれる，ほほえましい光景もよくお見受けしたものである。その奥様に昨年先立たれてからは大変お淋しそうで，大学の構内を一人で散歩されながら学生達に何か語りかけられているお姿をよく見かけたとお聞きしている。先生の御病気は7年前に発見され，以来激職のかたわら根気よく治療を続けておられたのであったが，不屈の御意志にもかかわらず，ついに不帰の客におなりになった。まだまだお元気でわれわれ後輩を指導していただきたかったのに，かえすがえすも残念でならない。心から御冥福をお祈り申し上げたいと思う。

（北海道大学教授　尾崎　晃・記）